

NBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No. **64**
2024 SUMMER

目次

- ▶ 名手訪問 / 対談 渡邊 健一 氏 (構成作家)
- ▶ 日本舞踊誌上講座 / 日本舞踊の歴史を振り返る④①
— 勳進帳の系譜④ —
東京大学名誉教授 古井戸 秀夫 氏
- ▶ 講演会 / 日本舞踊で覗く江戸と江戸その暮らし、その魅力①
日本大学芸術学部教授 小林 直弥 氏
- ▶ 会員等の動き、役員等名簿
- ▶ 令和五年度 正味財産増減計算書
- ▶ 特別会員御芳名
- ▶ NBF活動報告・行事予定



名手訪問

— 対談 —

★ 渡邊 健一 (放送作家)

★ 西川 均 (公益財団法人 日本舞踊振興財団 業務執行理事)

[敬称略]

★ 西川 渡邊さんは放送作家としていろいろなジャンルの方と仕事をされていますので、その視点で、日本舞踊にはもっとこういう可能性があるのではないかと、ということをお聞きしてみたいと思っています。まず、放送作家というのはどんなお仕事ですか？

★ 渡邊 テレビで台本を書く仕事の中で、脚本家はドラマだけを書く仕事ですが、私の場合はドラマ以外にも歌番組や情報バラエティや報道やドキュメンタリーも書きますので、放送にかかわるすべての分野の作家という意味で、放送作家と呼ばれています。台本や脚本以外に企画をしたり、演出やプロデュースもしますので、そのコンテンツ（出し物）がうまく行くように考える「何でも屋」だと思ってください(笑)

★ 西川 渡邊さんも最近日本舞踊習っているんですね。大人の手習い、いかがですか？

★ 渡邊 最高ですね！始めてみて気づいたのは、「見るよりやる方が100倍面白い！！」ということです。日本人の誇りを実感するには日本舞踊をするのが一番と思います。今の我々の生活は西洋文明一辺倒ですから、西洋風の暮らしが当たり前ですが、それでも、日本人のアイデンティティって何なんだろう、どうしたら日

本に生まれた事を誇りに思えるんだろう、という気持ちは誰でも持っていると思います。それを日本舞踊は、楽しみながら思い出させてくれる。本来は日本中の小中学校で教えるべき、国民的な芸術だと思います。

★ 西川 具体的には、踊っていてどんな瞬間に、そういう想いを感じたんですか？

★ 渡邊 初めて中腰になって丹田に力を入れ、踊り始めた時に、足の裏から何かが伝わってくる感じがしました。地の力というか大地の「気」みたいなものが自分の中に入ってくる感覚。その「大地の気」が自分の身体を通して、天にまで届いていく感覚。つまり、天と地のつながる通り道が自分なんだ。そんな感覚です。よく考えたら植物はどれもそうじゃないですか？根をはって幹があって天に葉が伸びている。だから踊りながら、自分が植物になったかのように大地に根を張って、天に手を伸ばしていると考える事もできる。ステキですよ。ワクワクします。これは自分が踊っているんじゃないぞ！大地からの「気」が体を通るときに、自然に体を動かしてくれているんだ。それが勝手に所作になって踊りになっているんだ…、そう思ったんです。そんな事をまだ初歩を習っている時に感じたんですから、少し誇大妄想かもし

れませんね…(笑)

★西川 いえいえ、渡邊さんらしくていい(笑)

★渡邊 その時に実感したんです。この「天と地を繋いでくれる踊り」は、西洋のモノマネではなく、まぎれもなく日本にずっと伝わってきたものだ。これは最高に誇らしいことです。

西洋の踊りはピョンピョン空に飛ぶものばかりです。たぶん神様が天にいると考えているから、そこを目指してピョンピョン上に飛ぶのでしょう。でも日本は八百万の神々です。あらゆるところに神様がいます。だから、地の気、水の気、あらゆるものを自分が吸い込んで、それが踊りになる。自分が万物の気の媒介なんだ。そんな気持ちになりました。

日本舞踊をご専門になさっている方ともしかしたら違う感覚なのか、あるいは同じなのかは存じ上げませんが、私はそんな感じを勝手に抱きました。それ以来、もう日本舞踊のとりこです。たぶん、今までやってない人も、同じような感覚になる人、多いと思いますよ。だからこそ、あらゆる人に踊って欲しいんです。日本舞踊を見るだけじゃなく、踊って欲しい。

★西川 こういう芸事って技術的なことに目がいきがちなんですけれども、3年にして本質を感じられたというのはすごいなと思います。芸事をなさった経験はあるんですか？

★渡邊 お褒め頂き光栄です(笑) 芸事という事で申しますと、私は少年時代、クラシック音楽の勉強をして音楽学校でクラシックの作曲を学んでいたんで、「守破離」みたいなものを体感した経験はありました。まず伝統そのものの「守」を習う。そ

して自分が「守」として習ったものを何度も繰り返すうちに、自分の中から自然と「破」が出てくる。少し逸脱したものかもしれませんが、守に対する尊敬を持っていれば、それは単なる逸脱ではなく、個性になっていくと思います。

で、その「破」の状態をさらに極めていくと、守破離の「離」に行きつく。その時に、自分の作為ではなく、天に動かされる感覚になる。日本舞踊も同じじゃないか、そんな事を妄想して、とても感動しました。

私は勿論まだ初歩の初歩ですが、日本舞踊を極めて行った時の喜びはいかばかりだろうと、その事を想像して、とても興奮しました。

★西川 芸能のジャンルは違えども結局は同じことなんでしょうね。音楽の高校を出られて、クラシック音楽を専門にずっと勉強されていたらした。楽器は何かなさっていたんですか？

★渡邊 ピアノです。

★西川 お仕事を一緒にさせていただいたとき、音曲のことにすごく詳しくて、ビックリしたのが、長唄のある部分を完全に五線譜に直され、五線譜に書ききれない部分があるとも仰っていましたね。まさしく日本の音楽の特徴なんです。長唄はまだいいんですけれども、清元とか常磐津などの浄瑠璃系、語り物になるとそれがもっと顕著なんです。大夫さんという語り手の個性・感性によって、結構左右されてしまうので、三味線がそれに呼応するようにあしらうみたいな感じのところ結構あるんです。日本の芸能が外国の人に分かりにくいというのは、そういう部分もあるんだと思います。とっかかりがカチツとしてない部分があるじゃないですか。

★ 渡邊 確かにそうですね。西洋音楽は厳密な規則に従っていますから、とても理屈っぽいんです。なかでもクラシック音楽は極めて数学的に出来ているので、「楽曲を構築する」と言ったりします。構造の作り方が建築に似ているからです。

理由は単純で、和音のつながりを音楽のベースにしているからです。和音はそれぞれの音が響きあう場合はとても心地よいのですが、少しでもずれると不協和音になって、耐えられない気持ち悪い音になります。だからそうならないように、規則が必要なんです。

これは余り一般的に知られていないことですが、恐ろしい事に、一つの和音から次の和音に行くのにも沢山の厳密な規則があるんです。たとえば、ドミソが鳴ってファラドが鳴ったら、その次に行ける和音は転調しない限り基本は4つしか選択肢がありません。「音楽は自由だ」という宣伝文句もありますが、実態は、西洋音楽に関してはクラシックもポピュラー音楽も、理論的にはひとつも自由ではありません。そこへ行くと、日本の音楽は徹底的に自由です。和音を音楽の基本にしていなくて、構造のしぼりがゆるやかだからです。その方式を日本人は恐らく、直感的に選んだんだと思います。だって450年ほど前の織田信長の時代に、宣教師によって西洋音楽が沢山流入しましたから、当然和音の響きにも山ほど接しているはずです。でも、それから何百年経っても、日本音楽は和音を導入しませんでした。取り入れたっていいのに、取り入れない。おそらく感覚的に拒否したんだと思います。これは日本人の感性に合わない、直感したんでしょうね…。

★ 西川 日本の音楽にも決め事は色々あるんですが、西洋から見た場合、日本の音

楽のどんな所が自由なんですか？

★ 渡邊 たとえば「あんたがたどこさ」という、日本古来のわらべ歌がありますよね。あれだって、西洋からみたら無茶苦茶な曲なんです。自由すぎるぐらいです。

冒頭から言いますと「あんたがたどこさ」、ここまでは4拍子です。そして「ひごさ」で2拍子になります。次に「ひごどこさ」、これは3拍子です。その次の「くまもとさ」もまた3拍子、ところが「くまもとどこさ」、ここで4拍子に戻ります。でもその次の「せんばさ」で2拍子。五線譜に書いたらとても複雑です。普通に考えて、一小節ごとに拍子が変わるなんて、西洋から見たら異常です。こんな曲はクラシック音楽にはありません。ベートーベンやモーツァルトにもない。時代がくだって20世紀にストラヴィンスキーの時代になって、ようやく西洋でも手に入れる手法なんです。そのくらい音楽的に高度な事を、理論いらずで、わらべ歌で楽しんでしまう。日本人の感覚はとても芸術的だと思います。

★ 西川 なぜ日本人がそういう高度な自由さを手に入れたと思いますか？

もしかしたら踊りながら歌っていて、自然に出来た曲だからかな、という気もしますが？

★ 渡邊 おっしゃる通りだと思います。私たちの身体が内包しているリズムが、この曲を自然に産んだんだと思います。決して作為ではない。踊りながら所作をしながら産まれた曲だから、こういう曲になった可能性はとても高いと思います。クラシックの作曲家で踊りながら作曲する人は一人もいないですから(笑)、西洋はなかなか真似できない感覚だと思います。

★西川 確かにヨーロッパ人というのは理詰めでものを考えますよね。私もイギリスに留学していたときにラバンセンターというダンスの大学に通っていたんです。そこでドルフ・ラバンというドイツ系の方が考えた、洋舞の譜の勉強をさせられたんですが、それは振付法という基本が本に書いてある。日本は振付法なんていうものはありませんから。感性に委ねてしまっている部分があるので、音楽はもとより踊りに関しても理詰めで考えるという民族性があるのかもしれませんが。

★渡邊 なぜ理詰めがルールが必要だったのかというと、ヨーロッパにはたくさんの民族が住んでいて、すぐ隣に全く別の民族がいるからだと思います。だからルールを作らないとめちゃくちゃになってしまう。契約社会にして、法で規定しないと国が混乱する。踊りや音楽などの芸術も、同じだと思います。理論書がないと、憲法がないと、まずそこから出発しないと一緒に何かする事ができないのが西洋。でも日本は「あうんの呼吸」でわかる。そういう事が背景にあるのだと思います。聖書も仏典もコーランも、こまかく厳密に書いてありますが、神道には教義書がない。これは教典がなくても心が通じ合えたからではないかと思えますね…。

★西川 今日一番渡邊さんに伺いたかったのは、日本舞踊は明治、大正、昭和、戦後くらいまで非常に盛んでした。でも能・狂言・歌舞伎などもそうですが、日本の伝統芸能、伝統文化と言われるものが、現代では生き残ることが難しい時代になってきました。着物が日常生活から離れてしまったので、着物を着て体を動かす事自体に慣れていないという理由もあると思います。そこで日本舞踊をもっとこういう風にしたら

若者や外国人に興味を持ってもらえるんじゃないか、いままであるものをそのまま見せるのではなく、本質は変えないで、ちょっと切り口を変えて、何か違う可能性が生まれるんじゃないか、ご自身でも日本舞踊を習われた上で、渡邊さんはこれからの可能性はどこにあると思われませんか？

★渡邊 私は、日本舞踊の可能性ほど大きく広がっているものはないと本当に思います。さきほど、踊っていて自分が「気の通り道」のように感じたと言いましたが、もう一つ分かった事があります。それは体幹がものすごく鍛えられるという事です。綺麗に踊ろうとすると、すさまじく体幹を使いますよね。お腹がひっこむ(笑)

白鳥が水面に浮いているときに実は水中で足を猛烈に動かしているように、日本舞踊は優雅に動いていても、いや優雅に踊れば踊るほど、実は体幹をものすごく使っている…。

だから例えばですけど、これからの日本人は、ジャズダンスで体幹を鍛えましょうというより、日本舞踊で鍛えた方がよっぽど良いと思うんですよ。なぜなら日舞は体幹が鍛えられるだけでなく、心も豊かになりますから。

今、日本女性の平均年齢は50歳を超えています、2人に1人は50歳以上なんです。その年代の人達が、100歳を目指して生きようという時、何十年もジャズダンスをバリバリできるとは思えない。でも日本中の大人達はできれば体幹鍛えたい、ダイエットしたいと思っているはず。それならエアロビクスやジャズダンスやウエイトトレーニングではなく、日本舞踊にしたらいいですよと、私は言いたい！だって、こんなに飽きがこない有酸素運動はありませんから！日舞で体幹を鍛えるブームが来れるように何かできないかと、



いつも考えています。この「日本舞踊ダイエット」、頭の中ではもうカリキュラムのイメージがあるので、これから具体化していこうと思っています。

★西川 なるほどね…。それでは身体を鍛えること以外に何か、日本舞踊の可能性の広がりがありますか？

★渡邊 今の世の中の流行に乗かって日舞をブームにするというやり方があると思います。例えば今年の大河ドラマは紫式部を描いた「光る君へ」ですけど、紫式部の時代の日本舞踊を踊ってみたいという人だっていると思います。そもそも紫式部の時代は踊りがうまい白拍子の女性たちがいて、少し後にはその白拍子の静御前が義経と結ばれました。彼女は日本舞踊の名人で、鶴岡八幡宮の前で踊った話が有名ですよ。静御前は「今様」の踊りで、「吉野山峰の白雪 ふみわけて～」と踊ったそうです。その踊り、見てみたいです。踊ってみたい。

さらに来年の大河ドラマ「べらぼう」は舞台が江戸時代の吉原です。主人公の蔦屋重三郎は、吉原の遊郭のそばで育ちますから、ドラマには踊りも沢山でてくるはず。その踊り、習ってみたい、目の前で見てみたいという方も沢山いると思います。来年の大河に合わせた日本舞踊のイベントは、人気になるのではないかといい気もします。そして来年は大阪万博もあります。そこで催される沢山のイベントに、地方自治体やスポンサー経由で、日本舞踊を広める機会が作れるよう働きかけるという事だってできます。そんな風に、その時々の中の流れに乗かって、日本舞踊をもっと広められないかと企画するのは、とても楽しい事だと思います。

★西川 そういう企画を考えるとときの、何かコツみたいなものはありますか？

★渡邊 クラシック音楽の世界でもそうですが、どうしても芸術家の方は「自分はこの見せたい」「わかってる人がこれを見たら、評価してくれるだろう」という観点で企画を考えがちです。もちろん、そういう「芸のご披露」もとても大切ですが、より広い層に訴えかけるためには、「もともと一般人が持っている興味と日本舞踊をいかに関連付けるか」という視点も重要と思います。そうやって世の中の流れとリンクさせて共感の輪が広がれば、それなら私も習いたいと、日本舞踊を習い始める人もさらに増えるのではないかと思います。

★西川 お話を聞いていて思い出しましたが、日本は世界一習い事が好きな国だと思います。よくローザンヌのバレエコンテストで日本人が上位ということがあります。外国の参加者はある程度大きいバレエ養成所の出身という子たちが出てくるのに、日本は町のバレエのお教室から外国のコンテストに参加していて、入賞したり優勝したりということがある。そういうことはなかなか外国にはないらしいですね。だからそういう意味ではおっしゃるように、習い事が広がる前提というのはあると考えていいわけですよ。

★渡邊 はい、そう思います。例えばヤマハ音楽教室は昔は子供のための音楽教室でしたが、今は大人のための教室にも非常に力を入れています。学生時代習ってみたい人が、定年で時間も出来たから、学生時代やりたかったギターやろうとか、ピアノやろうとか、そういう時代だと思うんです。ヤマハ音楽教室のような所は全国にありますか

ら、そういう所で日本舞踊を教える取り組みをするのも、面白いかなと思います。向こうもビジネスですから、交渉次第で応じてくれる可能性はあると思います。

西川 確かに今は、いろんな意味で時代の変わり目ですね。

渡邊 そうなんです、時代の変わり目。実は日本人って時代の変わり目はいつも踊っていたって、ご存じでした？

西川 時代の変わり目は踊っていた？という事ですか？

渡邊 戦国時代が終わって徳川幕府が出来た時、つまり一年中戦争していた時代から、平和な時代になった時、新しい時代への不安もあったのかもしれませんが、日本中、歌舞伎踊りに熱狂しました。歌舞伎踊りの一団は東海道をずっと踊って、江戸城でも踊っていた。その江戸時代が終わって、明治維新になる時、今度は日本中「ええじゃないか」で踊りまくった。そのあと大正時代はモダンボーイ・モダンガールの時代ですが、盛り場ではみんなチャールストンを踊っていた。戦争ばかりの明治時代が終わって、平和を謳歌する喜びから、つつい跳ねて踊ったのだと思います。そして今度は壊滅的な第二次世界大戦。これも終わったとたん、ジャズを踊り始めた。さらにバブルになったらディスコで踊る。つまり、日本人は時代の替りに踊るんです(笑)。これはやけくそになっているのか、嬉しくて踊りだしたくなるのかわかりませんが、いずれにしろ、新しい時代に立ち向かう時、身体性に立ち戻っているとも言える。時代の空気を、身体を動かす事で感じているとも言えます。そしてこの今もまた、大

きな時代の変わり目です。だから日本舞踊もチャンスだと思うんです。この100年、日本人は主に洋風のものばかり踊ってきました。飽きてる人も沢山います。ですから、うまくチャンスを作れば、再び日本舞踊の大ブームという事もありえると思います。

自分の自慢話をするようで恐縮ですが、私が「開運！なんでも鑑定団」を作った時、誰もヒットするとは思っていませんでした。でも、あれは計算されたものなのです。

日本のバブルは1992年に完全崩壊しましたが、番組スタートはその2年後の1994年。バブルは終わったんだから、もう一度足元を見直そう、実家の蔵の中を見てみよう、そしたら大変なお宝があるじゃないか。バブルなんかより、お宝の方がよっぽど我が家の歴史を誇れる。そういう時代性の中で生まれたのが、なんでも鑑定団なのです。それまで誰も見向きもしなかった「骨董品」だって日本を席卷するブームになるんですから、日本舞踊ならもっと有利なはずですよ。

西川 なるほど…。私は芸術的な本質は変えないで、日本舞踊をうまく残していくということ、立場上すごく意識をします。本質を変えないというのは、日本舞踊は着物を着て踊る芸能なので、決して洋服で踊るべきものではないし、日本の邦楽器、三味線・箏・打楽器（お囃子）に合わせて踊るのが日本舞踊であると思っています。時代によってある程度、洋楽の要素を取り入れていくことはもちろんあると思いますが、でも日本の楽器があるのだから、それを使って日本舞踊を何とかわかりやすい方向に持っていくにはどうしたらいいだろう、という方に注力した方がいいと思うんです。

★ 渡邊 日本舞踊のどんな部分を守って、どんな部分は時代に合わせてもいいのかというお話しだと思いますが、シェークスピアの演劇をたとえにして考えてみたいと思います。

私たちは「ハムレット」も「マクベス」も、普通に演劇として楽しんで、感動しています。

日本で見るシェークスピアがおかしなものだとは決して思いません。素晴らしい芸術です。でもよく知られていますように、シェークスピアの脚本は、詩のように韻を踏んでいて、英語の言葉遊びやダジャレも沢山入っています。聖書や当時の流行語なども引用している。つまり本当は、古い時代の英語の文献を沢山知っていないと、しかも英語で劇を見ないと深くは味わえないという考え方もあります。でも、たとえ翻訳しきれない英語の「韻律や言葉遊びや引用」の部分が沢山あったとしても、シェークスピアが本当に作品で伝えたかった人間の情念や業は、日本語で十分に伝わっていると思うのです。それならば日本舞踊も、その本質は何なのかを見極めて、本質を伝えるために他の要素は多少伝わりきらなくても我慢する、という事も必要かもしれません。

そんな「わかりやすいバージョン」を入り口にして沢山のファンを集めて、深く理解してきた人には、もっと奥深い伝統的な技をお見せする。そういう「段階を踏む日本舞踊の普及」は必要な気がします。

★ 西川 ちょっとヒントになるのかなと思ったのは、日本舞踊ってほとんどの作品が20分前後くらいあります。今の人にとって昔と時間の流れ方が違うので、20分のもを全く知らない人に、さあどうぞと言っても、最初の出だしがゆっくりしていたりすると、そこで飽き

ちゃうんですよね。そうすると「もう、このテンポ無理」ってなっちゃうけれども、途中からリズムカルな合いの手が入るパートも出てくる。日本の芸能ってこういうのもあるんだと最初にそういう所から見せて引き付ける、という考え方もありますよね。

★ 渡邊 おっしゃる通りですね。本道は残して行きながら、どう多様な入り口を作るかという工夫は効果があると思います。またクラシック音楽を例にお話ししたいと思いますが、いま私たちが聴いているオーケストラの響きはベートーベンが曲を書く時にイメージしたものとは全然違うんです。

どういう事かと言いますと、ベートーベンの時代は、ステージ下手側に、第一バイオリンの一群がいて、上手側に第二バイオリンの一群がいて、掛け合いをしたり、響きあったりしていました。つまりコンサート会場自体が左右の音で、ステレオ効果が出るようにしていたのです。19世紀のドイツ音楽全盛時代はずっとこの配置でした。

ところがアメリカの指揮者ストコフスキーが20世紀に、これを大胆に変えました。

下手側に第一バイオリン、その後ろに隣り合って第二バイオリンを配置。つまりバイオリンは全員下手側にいるようにしたのです。これによってバイオリン合奏によるステレオ効果は失われてしまいますが、レコード録音はしやすいし、複雑な楽曲を演奏する時、バイオリン奏者同士が互いの音を聴きあって、タイミングを図るのには適していました。つまりガラス細工のような精緻な演奏が可能になったのです。さらに楽団員が互いの音を聴きやすいので、練習時間も大幅に短縮できた。その分、芸術的な表現を工夫する時間が取れるようになった。そういうメリッ

トを考えて、ストコフスキーの配置を世界中のオーケストラが真似したために、現在の配置が一般的になりました。でもベートーベンが生き返って、今のオーケストラの配置を見たら、ビックリ仰天だと思いますよ。これじゃあ、バイオリン同士の掛け合いがないじゃないかと…。

また、大きな演目の上演時間という事で言いますと、音楽の父と言われるバッハの最高傑作「マタイ受難曲」は普通に演奏すれば3時間以上かかります。でも、それではなかなか上演する事はできない。だから大傑作「マタイ受難曲」でさえ、抜粋して短く演奏する事が普通に行われています。バッハが生き返ってそれを見たらやはりビックリ仰天だと思います！

自分の作品を300年経って演奏してくれるのは嬉しい。でも、これじゃあダイジェストで、いい所をつなぎ合わせてるだけじゃないかと言うでしょう。でも、「マタイ受難曲は全部ちゃんとやらないとダメだ」と厳密な事を言って、誰も演奏しなくなって忘れられてしまうよりは、たとえ抜粋でもいいから普及した方がいい、永遠に愛された方がいい。そういう考え方もあるのではないかと思います。日本舞踊もそれに似た判断が必要な時代かもしれませんね。

西川 渡邊さんみたいな知恵袋がいると、我々も「なるほどな」というのが出てくるので、今回一緒に仕事をさせていただいて楽しかったです。最初は僕は何を目指せばいいんだろう、着地点がどこなのかよく分からなくて。でも形になってみると「なるほどな」と思いました。本当に最初は何をすればいいのかという不安もあったんですよ。

渡邊 箕乃助さんはすごいなと思いました。

男女の矩を超えるし、和事と荒事も超えていくし、やはり至芸だなと思いました。

西川 60年、3歳からやっているの、芸事の良さですね、積み重ねることの。自分を出していくというのが、古典芸能の場合は遅いんですよ。そういう意識を持てるようになったのは、私は50歳を過ぎたあたりからです。それまでは教えられたことを忠実にしなければいけない。ある種、呪縛みたいなものがあるんです。だけど歳を重ねてはじめてそれが、もうちょっと習ったものをこう解釈してもいいんじゃないか、と思えるようになってきた。それがどんどん良くなって来た時に、もう肉体が衰えてきて表現がなかなか叶わなくなってくる。だから自分はこの10年、60代70代前半くらいが大事な時期なのかなと思うんですけどね。これからもご一緒させていただきなから勉強したいと思っていますので、よろしく願いいたします。

渡邊 とんでもない、こちらこそ。ありがとうございました。

PROFILE

わたなべ けんいち

渡邊 健一



放送作家・脚本家。

桐朋音大付属高作曲専攻をへて慶応大学文学部哲学科卒。芸大大学院伝統芸能ゼミの聴講生として伝統音楽研究。

中京女子大(伊達コミュ研)元客員教授。NHKで「うたコン」「クラシックTV」「SONGS」

「紅白歌合戦」を構成しつつ、伝統芸能番組を多数構成。「開運!なんでも鑑定団」「K-1格闘技」「たけしのTVタックル」「報道ステーション」など高視聴率番組の企画構成で活躍。



勸進帳の系譜④

東京大学名誉教授

古井戸 秀夫



長唄の『勸進帳』は、素唄でも面白く、演奏会はもちろん、素人のお稽古でも人気。関東大震災のあと、杵屋栄蔵が「サンデー毎日」に連載した、愛好家のための手引書「長唄のうたひ方」でも、心得に続いて、この曲が取り上げられました。単行本になった『長唄のうたひ方』（昭和2年刊）では、曲の並び順がかわりました



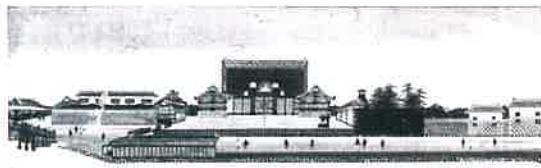
(資料1)

が、そのときには「芝居としての勸進帳」として、素唄の秘話も加わりました。昔は、長唄だけでなく、常磐津でも清元でも、芝居の初日があくまでは、お稽古は厳禁。待ちかねた去る大名に招かれて、作曲者の杵屋六三郎（のちの六翁）が駆け付けたのはよいのですが、演奏は途中まで。初日が押して、最後まで出なかった、というのです。六三郎は「明日、芝居でこの後をやりましてから、また改めて御聞きに入れます」と約束、翌日、それを果たした、というのでした。新曲を待ちわびるファンのこころは、今も昔もかわりありません。

『長唄浄観』（昭和24年刊）には、稀音家浄観から町田嘉章（佳声）が聴きだした秘話もありました。六翁は『勸進帳』の作曲に3か月かかった、といいます。ようやくできて嬉しかったのでしょ

う。「植木店」（十代目 杵屋六左衛門のこと）に出かけて、こんな曲ができた、と披露したそうです。あいにく、六左衛門が留守でしたので、代わりに倅の栄蔵（のちの勘五郎）が教えてもらった。根岸の勘五郎が「勸進帳は「池之端」の直伝だ」と威張っていたというのは、浄観が父から聴いた逸話でした。

植木店の六左衛門は、池之端の六翁より20歳も若かったのですが、芸の上では互いに認め合うライバルだったのでしょう。町田嘉章は、根岸の勘五郎の記録した『御屋舗番組控』を調べ、大名や旗本のお屋敷に、六翁と六左衛門が一緒に招かれていたことを報告しています。当時の栄蔵、のちの根岸の勘五郎は、池之端のワキも弾けば、植木店にも出る、両師の「かすがい」にもなっていたのではないのでしょうか。「番組控」には、『勸進帳』が都合33回記録されています。最も早いのは書き下ろしのわずか二年後、天保13年12月26日、場所は久保田（秋田）20万石の佐竹様の三味線堀の上屋敷でした。



(資料2)

「お好み」とあるので、リクエストがあったのでしょ

録の内、鳴物が入るのは5回だけ。「延年の舞」では、笛の代わりに三味線が活躍。演奏会では、明治に入って増補されたという「滝流し」を含め、派手に弾きまくる三味線が魅力になっています。『勸進帳』の初演のとき、三味線も長唄もタテが二人いました。これが「両タテ」のはじまり、とされました。そのためでしょう、「へついに泣かぬ弁慶も」をはじめ、「へ人の情けの盃を」とか、「へ人目の関のやるせなや」など、長唄の喉の聞かせどころも、たくさんあります。歌舞伎と違って、わずか30分弱で唄い切る、スピード感も素唄の魅力でしょう。

『勸進帳』の人気は格別でしたので、人形芝居でも見逃すことはありませんでした。現行曲の『鳴響安宅新聞』の初演は明治28年大阪稻荷座、「名人団平」と讃えられた豊沢団平の作曲でした。長唄はもちろん、本行の謡曲とも違う、太禰の音色を活かした豪快な演奏で、『壺坂』『二月堂』にならぶ団平の名作に数えられています。原作は「道行」「関所(勸進帳)」「春日台」と上中下三段ありましたが、現在は「勸進帳」のみ。弁慶・富樫・義経だけでなく、四天王に番卒2人もすべて出語り、出遣いで、義太夫の太夫が9人三味線6人、人形遣いが23人、舞台にずらりとならぶ豪華さで、文楽の興行になくはならない演目になっています。

NHKのDVD人形浄瑠璃文楽名演集『勸進帳』には、人形の吉田玉男、文字太夫(のちの住太夫)、勝平(のちの喜左衛門)のインタビューがあります。3人が異口同音に言うのは、勸進帳の読み上げまで前半が「しんどい」。人形は、立ったままで、じっとしているのが辛いそうで、動き始めるとラクになる。浄るりも三味線も、息を詰めているのがしんどい、そこから解放されると流れるように進んでゆく、というのでした。

DVDの収録は、昭和58年。国立文楽劇場が開場する前でしたので、道頓堀の

朝日座。花道がありました。四天王の人形は、主遣いだけで花道を走る。義経も走りますが、足遣いの足の動きの早いこと。弁慶では、足遣いも、ワキも出遣いで、主遣いとワキが金剛杖をたくみに操ると、足遣いは、片足で「ケン、ケン、ケン」と宙を飛ぶ。人間では不可能な、人形ならではの面白さでした。玉男いわく、この足遣いで認められることもある、と。玉男自身も戦前、急な代役で足を遣い、注目された、そのひとりでした。そのときの弁慶は、名人吉田栄三。栄三も、書き下ろしのとき二日間、病気代役で弁慶を勤めた、といます。栄三は、昭和に入り、『勸進帳』を復活。その勢いで東京の歌舞伎座に進出したとき、満を持して出したのが、弁慶でした。花道の引込みも、このときに工夫されたものでした。振付は、榎茂都流の家元、陸平。宝塚レビューを創った振付家でした。



(資料3)

(資料1) 長唄のうたひ方 (杵屋栄蔵 著、創元社) 表紙 / 『日本の古本屋』。

(資料2) 「下谷七軒町の佐竹家上屋敷を描いた絵」 (仁平裕一さん蔵 / 『広報あきたオンライン版』。

(資料3) 「勸進帳」の一場面 / 『X 国立文楽劇場 (大阪・日本橋) @nbt_osaka 2022年11月11日』。



日本舞踊で覗く江戸

と

その暮らし、その魅力①

講師 小林 直弥 氏
(日本大学藝術学部 教授)

本日は「日本舞踊で覗く江戸とその暮らし、その魅力」という演題でお話をいたします。

日本舞踊は、我が国の信仰、暮らしやその時代の思想など、民俗の文化を全て一まとめにした舞踊表現で、「温故知新」という考え方に基づく日本の伝統や文化を総合的にまとめた古典芸術と言え、特に江戸時代の豊かな暮らしも多くの作品の中で描かれています。そこで江戸とその暮らしに焦点を当てお話をさせていただきます。

そもそも江戸という土地は、徳川家康が入るまでは海岸沿いに葦が生い茂る湿地で何もない場所でした。それを家康が豊臣秀吉から冷遇され与えられた領地だったのです。だからこそ江戸は家康が意地で作った巨大な城郭都市とも言えるかもしれません。さて、江戸時代というのは、慶長8年(1603)に江戸幕府開城し、最後の将軍、第15代徳川慶喜が征夷大将軍の職を辞した大政奉還が慶応3年(1867)。明治を迎えたのが翌1868年でした。したがって凡そ江戸時代はだいたい264年続きました。江戸の人口は、資料により差異がありますが、1650年でだいたい43万人くらい。1750年頃には122万人まで増加。同じ頃の大坂が41万人くらいです。数字を見てもわかるように国内でも大変な数の人が江戸に集まっていました。ちなみに1800年代の中国、清朝の首都、北京は90万人くらい。イギリスのロンドンでは86万人。フランス、パリは54万人ですから、他国と比べても江戸というのは相当な大都市だったことがわかります。

また、現代の私たちの暮らしから見れ

ば、江戸時代は不便なのではないかと思う方もいるかもしれません。確かに現代のようにスマートフォンやインターネットも使えませんし、電車もバスもない。しかし不便だったとも言えないのです。例えば、今では、水が飲みたければどこにでも自動販売機はありますが、江戸では大通りを威勢よく「水売り」が「ひゃっこい！」と売り歩いていました。日本舞踊作品でも常磐津「水売り」でその風情がよく描かれています。また、深夜にお腹が空いたら、落語にもよく登場しますが、蕎麦屋を探せば夜中でも蕎麦が食べられたり、凡そ今のようにコンビニはありませんが、大体のものは、それぞれの品物の物売りがそこらじゅうにいたので、呼べば大凡その場で買えたりしました。日本舞踊作品にも、こうした物売りが登場する作品も多くあります。また、実は江戸にはちゃんと水道もありました。長唄「藤娘」にも「水道の～」という歌詞がありますが、江戸っ子の自慢といえば、「水道の水で産湯をいただく」というくらい、江戸にはすでに上水道が引かれていました。さらに、例えば紙くずやゴミが出たら、通りを掛け声も良く屑集めやそれぞれの回収が来ましてし、それをリサイクルもします、煙管や傘でも、何か壊れたら修理やリユースもできる。実は江戸は意外と便利で快適、今で言えばSDGsを实践したエコロジーな都市だったので

ではまず、江戸の花見の文化についてお話しますと、江戸の花見の始まりは、三代将軍家光公が上野の寛永寺に山桜を植えて花見をしたという記録が残ってい

ます。花見が一番有名なのは八代将軍吉宗公です。自身の御殿があった隅田川沿いに花を植え、それから御殿山（現在の品川）、また北区にある飛鳥山、小金井市の小金井堤に桜を植えました。これらの場所が江戸時代からの桜の名所になりました。その当時はまだソメイヨシノはなく、吉野の桜を植えていたようですが、江戸の後期になると、現在の豊島区染井村から新種の桜が出て、奈良の吉野桜と区別するために「ソメイヨシノ」という名前を付けたそうです。そんな桜や花見が登場する日本舞踊作品ですが、常磐津「年増」があります。向島の土手で羽織芸者が、旦那の浮気相手の文句を言う「しゃべくり」の踊りが見せどころです。他にも長唄「元禄花見踊」は皆さんご存じのように、元禄、江戸の初期ころの花見の様子が謳われている作品ですね。また、長唄「吾妻八景」では御殿山の風景が、長唄の「手習子」では塾（手習い）の帰りの女の子が道草している風景に桜が登場しています。

さて続いてのお話は夏の風物詩と言え「七夕」です。日本舞踊の作品、清元「流星」は七夕の話ですね。七夕は「しちせき」とも読みますが、もともと七夕という言葉は、宮中では、神様が使う着物を織る、「棚機女」という巫女が一所懸命機織りをし、それを神様にささげるために棚に置くことを指して棚機といたしました。そこに中国から伝わってきた伝説、牽牛（彦星）と織姫の物語で、織姫が着物を織る仕事をしていたので、それが日本の棚機の行事と習合したのが日本の「七夕」です。七月の近くになりますと、長い竹を空高く掲げ、そこに願い事を書いて短冊に括り付けたようで、その竹も季節になると竹売りが売りにきました。短冊の他、願い事を象徴する飾りも掲げたようで、作り物の兜をつけたり、瓢箪をつけたり、色々なものを天高く上げて願いを聞いてもらおうと考え、七夕には江戸の

町屋の屋根に色々なものが掲げ吊るされていました。

旅行も今と同様江戸時代も大人気でした。特に江戸っ子が一番憧れていた旅行がありましたのでお話をしましょう。それが現在の三重県にある伊勢神宮への参詣、「伊勢参り」です。一生に一度は伊勢に行ってみたい。伊勢参りは江戸時代に大変流行りました。江戸の人は健脚で一日40キロくらい歩いたそうですが、早い人で半月、凡そ15日くらいで江戸から伊勢まで着いたそうです。また、ついでに伊勢参りの後に名古屋の熱田神宮や京都に行ったりした人も多かったようです。江戸時代ってそんなに簡単に旅ができたの？と疑問を持たれる方もいるかもしれませんが、当時は「伊勢参り」に託けて旅をすることが結構許されたようです。基本は関所を通過する際に必要な「通行手形」を奉行所で受けて出るのでありますが、たまに無許可で行ってしまう人もいたようで、そうした伊勢参りを「抜け参り」と言ひまして、一応罪に問われるようですが、なんと後から伊勢へ参詣した証拠を提出すれば案外お咎めなしだったようです。しかし、基本的には旅費もかかるので江戸の長屋では「講」というグループを組んでいました。町内や村で定期的に貯金して、その中で抽選会をやり、当たった人がその年の伊勢参りに代表で行くことができました。そういうこともあったので、一生に一度くらいは行ける期待も大きかったかもしれません。但し、大店の奉公人などは長屋に住みませんので、講に入れてもらえず「抜け参り」をする者もあったようですし、旅の道中、お金に困ると柄杓を持って乞食暮らして歩き、それでも伊勢神宮へ参詣したと言ひます。また、60年に一度、「お陰参り」というのが江戸時代に3回巡ってきたようで、その都度100万人を超える人が伊勢神宮を参詣した記録が残されています。しかし、当たり前ではありますが、やはりそれで

も伊勢参りにはいけないの方が多かったようです。また、江戸に近い、現在の神奈川県、相模国の大山阿夫利神社への参詣する大山参りも人気の参詣スポットだったようです。こちらは主に鳶職の方が行く神社で木の太刀を奉納しに行くのです。入山してから水垢離の水を浴びて清め安全を祈願して戻ってくる「大山講」は江戸時代を通し流行しました。清元「山帰里」という作品がその風情を描いた作品ですが、中には大山に行くと言って出かけておいて、実は現在の神奈川県藤沢市の江ノ島に行ってしまう。江ノ島は弁財天が有名で、江戸時代を通し大山に次ぐ人気の祈願所ではありましたが、遊里もあったので、大山ではなく江ノ島に行った帰りに、途中の街道の分岐点にあった長後で大山土産を仕入れて帰る鳶もいたようです。その他、江戸時代から富士山を登る信仰、富士講も人気もあったのですが、江戸時代には女性は五合目までしか登山が許されていませんでした。そこで江戸の女性に人気があったのは現在の東京、八王子市の高尾山登山でした。高尾山は、比較的女性でも容易に登山でき、頂上から富士山がよく見えます。江戸の昔から高尾山も人気だったようです。さて、今度は祭のお話。江戸の祭りというと、日本舞踊作品だとやはり、清元「申酉(お祭り)」が人気ですが、「申酉」は赤坂の日枝神社の山王祭りが舞台。同じく清元「神田祭」は神田明神が題材です。この二つのお祭りは、江戸時代「天下祭り」と言われ、隔年で江戸城内に神輿や山車を入れることが許されていたのです。神田祭りは9月15日で、神田明神と神田神社のお祭り、そもそもは室町時代、太田道灌の時代まで遡ります。実は神田明神では神楽ではなく「神能」という能をやっていたのですが、その後家康公が江戸へ入ってきて家康公の領地になってから、1600年に起こった天下分け目の関ヶ原の合戦の日ちょうど神田明神の祭礼があ

り家康の勝利も祈願したところ、結果関ヶ原の戦勝利に貢献したとして徳川氏に代々加護されるようになり、今も神田祭りとして続いています。

(次号に続く…)



PROFILE

こばやし なおや
小林 直弥

日本大学藝術学部 教授
(藝術学部演劇学科舞踊コース日舞専攻担当)

日本大学大学院
芸術学研究科舞台芸術専攻主任
舞踊学会理事

主に日本舞踊の古典舞踊、また日本舞踊から考察した舞踊創作の研究、日本芸能史、日本演劇史(能楽・歌舞伎を含む)、民俗学、民俗芸能研究、舞踊学における理論研究を主軸とし、論文執筆、創作舞踊作品の創作・台本製作・演出も手掛けている。その他、社会活動として、社団法人日本舞踊協会公演(国立劇場大劇場)での作品解説をはじめ、国立劇場主催公開講座での講演、NHK番組「プラタモリ #128 阿波踊り～阿波踊りは何故生まれた?」で、阿波踊り担当案内人として番組出演。また、毎年広島県安芸高田市で開催される全国の高校生が日本の伝統芸能である神楽を披露し競う「高校生の神楽甲子園」では、第9回から日藝選奨候選定審査役を勤めている。2023年は、愛媛県四国中央市で開催された「書道パフォーマンス甲子園」でパフォーマンス部門予選審査員を担当した。



理事会

開催年月日	議事事項	会議での結果
令和5年12月28日(木)	第1号議案 令和5年度臨時評議員会開催について	書面により可決
令和6年 3月18日(月)	第1号議案 令和6年度事業計画(案)について	書面により可決
	第2号議案 令和6年度収支予算書(案)について	書面により可決
	第3号議案 令和6年度評議員会開催について	書面により可決
令和6年 5月20日(月)	第1号議案 令和5年度事業報告(案)について	満場一致で可決
	第2号議案 令和5年度決算報告書(案)について	満場一致で可決

評議員会

開催年月日	議事事項	会議での結果
令和6年 2月19日(月)	第1号議案 監事候補選任について	書面により可決
令和6年 6月24日(月)	第1号議案 令和5年度事業報告(案)について	満場一致で可決
	第2号議案 令和5年度決算報告書(案)について	満場一致で可決

公益財団法人 日本舞踊振興財団 役員名簿

■理事長

青山 幸恭

■業務執行理事

西川 均
(西川箕乃助)

■理事

田中 正行
登 誠一郎
福田 博
藤間 良(藤間勘十郎)
三隅 治雄
水野 豊

■監事

小山 敬次郎
大友 祐輔

■評議員

内堀 祐子(西川祐子)
越智 久男
近藤 瑞男
龍居 竹之介
田中 英機
中村 作二
藤田 康幸
古井戸 秀夫
丸茂 美恵子(丸茂祐佳)

[50音順敬称略]



令和五年度 正味財産増減計算書

令和 5年 4月 1日から令和 6年 3月31日まで (単位:円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	0	100,000	△ 100,000
基本財産受取利息	0	100,000	△ 100,000
特定資産運用益	0	140	△ 140
特定資産受取利息	0	140	△ 140
受取会費	3,080,000	3,470,000	△ 390,000
個人会員受取会費	1,880,000	2,070,000	△ 190,000
特別会員受取会費	1,200,000	1,400,000	△ 200,000
事業収益	2,007,950	2,311,600	△ 303,650
青少年に対する舞踊普及事業収益	717,450	20,800	696,650
日本舞踊の新人養成事業収益	216,000	180,000	36,000
講演会の開催事業収益	63,000	77,000	△ 14,000
制作協力等支援事業収益	1,000,000	2,000,000	△ 1,000,000
衣裳楽器等貸与事業収益	11,500	33,800	△ 22,300
受取補助金等	895,500	881,500	14,000
受取国庫補助金	417,000	403,000	14,000
受取地方公共団体助成金	478,500	478,500	0
その他収入	636	1,000,630	△ 999,994
受取利息	36	30	6
有価証券運用益	600	600	0
雑収益	0	1,000,000	△ 1,000,000
経常収益計	5,984,086	7,763,870	△ 1,779,784
(2) 経常費用			
事業費	5,440,054	5,197,784	242,270
給料手当	1,088,020	1,109,855	△ 21,835
法定福利費	24,820	14,259	10,561
旅費交通費	160,902	149,678	11,224
通信運搬費	426,819	395,796	31,023
消耗品費	94,025	93,355	670
修繕費	95,370	228,349	△ 132,979
印刷製本費	197,780	577,850	△ 380,070
賃借料	438,200	168,400	269,800
諸謝金	2,307,000	1,822,000	485,000
委託費	195,000	342,800	△ 147,800
雑費	412,118	295,442	116,676
管理費	1,868,319	1,908,962	△ 40,643
給料手当	192,010	195,865	△ 3,855
法定福利費	4,387	2,528	1,859
旅費交通費	30,488	33,128	△ 2,640
通信運搬費	48,370	39,043	9,327
支払手数料	1,377,010	1,379,620	△ 2,610
消耗品費	12,509	11,076	1,433
修繕費	16,830	40,304	△ 23,474
租税公課	2,000	1,000	1,000
雑費	184,715	206,398	△ 21,683
経常費用計	7,308,373	7,106,746	201,627
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 1,324,287	657,124	△ 1,981,411
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 1,324,287	657,124	△ 1,981,411
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 1,324,287	657,124	△ 1,981,411
一般正味財産期首残高	111,272,744	110,615,620	657,124
一般正味財産期末残高	109,948,457	111,272,744	△ 1,324,287
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高	109,948,457	111,272,744	△ 1,324,287



日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、
下記の方々にご支援をいただいております。
是非ご賛同お願い申し上げます。

会費 1口 10万円(1年間)

特典 会報のご送付
会報・公演プログラム等にご芳名掲載
財団主催イベントにご招待



飯田 信子 (飯田不動産 代表)

東京信用金庫 (理事長 半澤 進)

飯田 良枝

(株)ビデオフォトサイトウ (代表取締役 海老原 利明)

(有)かつら大阪屋 (代表取締役 長坂 誠一郎)

(株)ホテルオークラ東京

歌舞伎座舞台(株)

藪本 俊一 ((株)古美術藪本 代表取締役)

(有)ギャラリー竹柳堂 (代表取締役 藤澤 繁)

山本化学工業(株) (代表取締役 山本 富造)

松竹衣裳(株) (代表取締役 武中 雅人)

(株)吉 岡 (代表取締役 清水 喜重郎)

(株)瀧川峰晴堂 (代表取締役 瀧川 明行)

[敬称略]



財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務所までご連絡ください。
特別会員についてご説明します。その上で、ご希望の方には申し込み
書類をお送りさせていただきます。

財団事務局 TEL03-3354-5496



NBF活動報告

文化庁伝統文化親子教室
—新宿区日本舞踊こども教室

日 時：令和5年10月9日～令和6年1月13日
会 場：新宿区戸塚地域センター
新宿区四谷地域センター多目的ホール
内 容：日本舞踊の基本的な動作、挨拶の仕方を習得。
その後、概ね1曲を仕上げよう稽古し最終
日に保護者に披露した。
主 催：公益財団法人 日本舞踊振興財団

第56回講演会

日 時：令和6年1月22日(月)
会 場：東京信用金庫本店
講 師：日本大学芸術学部教授 小林直弥氏
内 容：「日本舞踊で覗く江戸とその暮らし、その魅力」
と題し日本舞踊の成り立ち歴史に始まり江戸
時代の日本舞踊、歌舞伎、吉原の変遷など
について。
主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団

新宿区日本舞踊鑑賞教室

日 時：令和6年2月10日(土)
会 場：新宿区立四谷小学校 体育館
内 容：5年生を対象に日本舞踊についての簡単なレク
チャーを行い、その後日本舞踊の一部を上演し、
全員で足拍子等の体験を行った。
主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団

幼稚園おどり教室

日 時：令和6年2月29日(木)
会 場：東洋英和幼稚園
内 容：幼稚園児を対象として普段手にすることの少な
い邦楽器に触れ、日本舞踊に親しんでもらい、
踊り手の舞台化粧、衣裳、かつらをつける様子
も間近に見えるような設定をし、その後保護者
向けに簡単なレクチャーの後、長唄「手習子」
を上演した。
主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団

狂言教室発表会

日 時：令和6年3月21日(木)
会 場：杉並能楽堂
内 容：狂言の装束をつけ1年間の稽古の成果を発表
した。

中学校日本舞踊鑑賞教室

日 時：令和6年6月6日(木)
会 場：東洋英和女学院中学部
内 容：中学生を対象に「越後獅子」「女伊達」を上演した。
そのほか全員参加の体験プログラム、邦楽器の解説、
効果音クイズ等を行った。
主 催：東洋英和女学院中学部

宇都宮市日本舞踊鑑賞教室

日 時：令和6年6月18日(火)
会 場：宇都宮市文化会館ホール
内 容：宇都宮市内の小学生を対象に簡単なレクチャーを
行い「採り三番叟」「手習子」を上演した。
主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団 ほか



NBF行事予定

新宿区「こども文化体験プログラム」 —日本舞踊—

日 時：令和6年7月31日～令和6年8月2日
会 場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
内 容：新宿区主催のこども向けの体験教室
主 催：新宿区

文化庁伝統文化親子教室 —新宿区日本舞踊こども教室—

日 時：令和6年10月～令和7年1月
会 場：新宿区四谷地域センター多目的ホール
内 容：日本舞踊の基本的な動作、挨拶の仕方を習得。練習曲を決め8回にわたり1曲を仕上げるよう稽古する。
主 催：公益財団法人日本舞踊振興財団



公益財団法人 日本舞踊振興財団
「NBF」 No.64

発 行 公益財団法人 日本舞踊振興財団

〒162-0066 東京都新宿区市谷台町8番12号

発行日 令和6年7月

ホームページはこちらから ▶▶▶

<https://nihonbuyo.or.jp>





公益財団法人 **日本舞踊振興財団**

〒162-0066 東京都新宿区市谷台町8番12号

TEL:03-3354-5496

FAX:03-3353-5634

<https://nihonbuyo.or.jp>

E-mail:office@nihonbuyo.or.jp

